

5 寛政三年刊『花供養』

底本 月明 校異 松宇

## 花供養

(表紙・題簽)

(表紙見返し)

花のあるじとなり、花のかくとなりける

時世粧のさま／＼にはあらず。かの桜

木の像前に花をたてまつり、ほ句を

手向つゝとし／＼供養あることいと

尊し。さればかすみわたれるあづまの

はて、霧こむるつくしのかぎりまでも、

月に柴の戸のさびしをりをしたひ、

阿弥陀坊の光りをつゝみし苔の下、

浅からぬこゝろざしをおこして、春の

雁の便りまつ人々南北にもすくな

からず。ことしはやつがれら茶に清泉を

はこび、香炉に灰の塵を払らふ執事とは

なり侍る。頃は寛政亥の年弥生中

の二日、仰むけば阿弥陀が峰や花の雲と

東山芭蕉堂にたてまつりて、つたなき筆を

拭ふ。可能拝。」

翁こゝに花と双びの林かな

清秋

魂まねくべき蝶鳥の中

闌更

うす霞浪卷雲の尻兀て

暁台

貝がら道のつゞくこし方

素里

おくれては小唄もうたふ御沓持

鼠洛

三日さめざる酒に名をとる

野笛

兔や角と月にまたげし竹柱

鉄翁

幾世かざれし石に秋風

不木

露深き草の中なる笠の骨

定雅

都をさして座頭四五人

桃睡

飯食ふて間なき体を横たへり

百池

濡にぞぬれし川狩の宿

完而

数々の嘘つくうちに罌粟散て

不朽

縁きり神の告やまつらん

得終

いつしかに世を宇治山を隔住

其成

木の葉隠れの月登りたり

芦涯

梟は真向に律を聞ならめ

古塘

錆鮎落る別荘の前

自来

入道の肩にかゝりて出たまふ

一峰

長崎蒸の菓子並べたり

月峰

下枝の花に懸たる玉箒

玉屑

竹の奥なる春深の宮

柏由

剣打む程よく水のぬるむ頃

東洋

蓮根は人の老となるもの

巴竜

三俵の米施して訪も来ず

草牙

大師の作の仏買ふ也

筆

下略

奉納歌仙

しのばずや桜吹こす池のうへ 在江戸 爪坊

南は東風に雨気つく空 菊明

掃頃を紙の蚕のうるおひて 百静

いくたりの子があるにそだてる 左鶴

さし入る夜の衾の月清き 百柿

やゝ秋声の賦をうたひけり 青奴

優婆塞が小金朽たる磯の露 百機

離魂とやならん世の人の恋

百鯨

夏引のおかぜの乱れ打かこち

一葦

蚤をふるふて木の下にイ

黒郎

総房に朱鞍おきたるはなれ駒

砂上

はやく灯ともす家並の雪

古龍

乞食に白粥配る宵の月

青瓠

無言の僧の鉦たゝき行

坊

見あぐればみあぐる程の瀧の浪

明

きれて梢にもどる糸遊

静

沓捨ん余情や花の副車

柀

夢は覚しかとひらと舞ふ蝶

女

蓮止

四つ壁の崩れしまゝに膝いれて

花弟

名もうづもれし玉島の脇

荷菊

御鏡の塵に交はるふる社

千鶴

天窓くだしに雫の雨

柀

女房の人に馴たる町はづれ

鶴

狐にうけし癩の呪ヒ

機

一葉なる芦間の棕たゆとふて

鯨

濁酒によるや情盆の月

きり／＼す紙燭の下に音もいれず

菌の山の公事もむかしに

このあたり大宮人の檜柏

お賀のかちんを手とりはいとり

鶴の間の鶴の衝立こけかゝり

こゝろの外の恋をするかな

烏羽玉の闇のたそがれ責くれど

繫とゞめし海賊の舟

奴

郎

上

坊

瓠

龍

鶴

止

明

手向ともなれよあづまの潮の花

静

木かげも茂る姫松の春

筆

奉納句順任至来

おしまれて散る世のさまや初桜

伊賀上野

未塵

十八里おくもゆかしや花ざかり

一如

花もどり水振舞はゞはなくれん

勢州白子

無曲

白浜やさくら消こむ山おろし

帯川

けふもまた見残す花や三井の鐘

、津

万化

かゝる時命も延む花のもと

、

銀岱

制札は去年のまゝなり初ざくら

、

自酬

千金の価つもるやさくら花

、

春鶯

よひ中の垣もくずれて桜哉

、

歌斗

花ちりて禁を埋むさくらかな

、

御風

花みちて空さだめなく成にけり

、山田

雀汐

山伏の鼻に氣のつく花見かな

、

茶菊

明暮を花にたらはぬこゝろ哉

、

連之

肘笠も花かざす夜の眠りかな

石薬師

甘谷

朝風や禁のさくら咲おくる

珉山

栗櫃に市のしるべや花のおく

四日市

馬曹

山はあらしとてもけふより散る桜

尾州

五周

花の雲花の灌経てさくら狩

遠州浜松

白輅

さくら見や人のこゝろも八重一重

知白

島台に乗べき花のあるじ哉

春仸

匂ひせり花の辺りの忘れ水

約我

朮まくら雨のさくらの憂かりけり

、川崎

演之

花にそむ心野山にあまりけり

甲州

可都里

花の山守と思はゞ住倦ん

江戸

完来

筵あり花の木の間のねぢけ人

宗讚

花咲そめて散れども／＼さかり哉

左鶴

夕ざくら我に一枝曇りけり

青瓠

山もとや花になるべきけふの雨

古龍

誰が庵ぞ花の雪吹の中やどり

黒郎

大名の花守るかはり／＼にも

長厚

朝風や花潜る鷹の雫する

房 磯村

英

薄暮て月に又見るさくらかな

此君

有がたき姿拝む花供養

梅破

寢覚ては花のおもはるゝ夜の雨

凌花

年をへて花の手向もいくゑにし

倭風

けふはまだゆるす桜のあらしかな

大津

如々

ちる花にいざよふ浪やよしの川

、

井子

騎射すゝむ半は雪のさくら哉

、

陀仏

女房の花見を宵の願ひかな

江州粟津

一萍

星ひとつ朧に猶しはなの雲

、 草津

東郊

山形に夜は明にけり花の雲

、 辻村

千鷲

花満て曇る木下の雫かな

、

りき

まだかぜのうき肌しらず初桜

、

千鯢

廬せむ都の左やまざくら

、

花仙

飛星の影に散りけり夜の花

石部

亀渕

見ぬ花の便りの人に馴染けり

平松

亞溪

二羽からすおりゐる岡や朝桜

、女

しう

うたかたや船に詠る島の花

駒井沢

柏由

花散て浮世に遠き庵かな

霞川

おそ桜凄き杉間に咲にけり

楽遊

山陰や花の梢を日のめぐる

篠原 暁宇

咲初る日やうつり来て花の守り

杉江 素風

夢にだに魂うばはるゝ桜かな

彦根 繡虎

立山や地ごくもあればさくらあり

、 水石

茶の会はいつか過行花見かな

勝部 周路

花にくれてかえりものうしがけ伝ひ

、 梅山

花にめで暮していたし首の骨

守山 花橋

五六人花に行身のそぶり哉

、 錦月

我を見ず美童子入ぬ花のおく

三宅 酔月

散かゝる花やさはちの魚の骨

水口 梨風

翌とおもふうちにも雨の桜かな

呉雪

我まゝに山踏わける花見かな

斯馨

這伝ふ児甘嗅し花の下

李明

齒葉の居合一ふり花の中

暮一

夕ざくら破たる窓の詠め哉

竹葉

富士かとも見まがふ峰の桜かな

麦盛

聞てさへよし野はさぞや山桜

翅溪

花盛り凡十日の日和かな

蓮車

夜桜や此時世をぞ忘れけり

土山

露橋

日をうけて山静なり夕ざくら

、

探湖

本の夜は後に明けり山ざくら

、

素風

元日の気持わすれず花またん

信州上田

雲帯

叱られて馬士の上見る桜哉

、佐久郡

柯則

うかるゝはこゝろに余る花見哉

、松本 田舎坊

花守に去年の盛りを問にけり

、

可考

酔さめて山ざくら戸の月夜哉

、

雨暁

夕山や花の中なる鳩からす

上州前橋

土蘭

山城のかまへゆるみて花ざかり

、

輪賀

月の出て漸花にわかれけり

、

四祖

御出入のおやしつけにき花盛

、

素同

あの山の花に寝るかもやまがらす

上州高崎

雨什

世忘れに花見る身こそ命なれ

境町

専車

狩入し花をかえさの栞りかな

宮崎

朔宇

花守の花に肥たり帯の尺

富春

木鼠の飛て花散るゆふべかな

才丁

我窓や真向ならずも山ざくら

羽黄

香に匂ふ花のあたりの土竈

尺龍

人さつて桜しづまる夕べ哉

松和

夕桜松のくろきは星月夜

南甫

花に独山路鳥の一つ啼

暁鳥

はつ桜禁に眠る供廻り

竹雨

かぎり有と花に戸ざゝぬ夜は月夜

亭々

けふもまた心迷ふや花曇

富岡

露情

入相に風静りぬ花の寺

尹口

桜八重葎は二葉片折戸

玉斧

みなみ向何塵もなし花の庭

知十

紅みの小袖はづかし薄ざくら

女 都野

夕栄や磯並ざくら舟にちる

吉井

其蝶

散る花に日傘かざすや知恩院

龍山

めづるとてどふ折らりよぞ初桜

白圭

鐘つきの雲踏登るさくら哉

津軽

暁翠

真白に見ゆる杉間の桜かな

雪川

花満て山門覆ふさくらかな

草夫

花に生き替りてうれし無垢世界

若州小浜

巨川

いたづらに花散埋む御廟哉

花の雨湯谷を諷ふて立さらず

ちるや咲や花にをく身のいそがしき

花に寝ん都の東にしのはて

咲花に五日の風の音もなし

月落て桜しらみぬ山かづら

山桜花の下風吹にけり

花なくばしらじ谷間の籠り堂

眸に外山の花の薄ぐもり

、

百馬

、

左橘

、

丈葉

、

陶河

、

藤井

千里

、

ノトノ

鬼雀

、

、

仙舟

、

少年

斗南

、

吐雲

瀧の音も静になりぬ花ざかり  
西津

漁林

花ざかりふたひら三ひら散にけり  
、

雪肆

花は盛少し隔て酒呑ん  
、

鶯少

散る花や外山の雲の動きより  
、

柳只

薄暮やひとり残りし花の陰  
、

烏友

島山や花に啼鳥は何々ぞ  
、

呑空

動きなき花の曇りの真昼かな  
、

巴陵

花守となりて其日をくらしけり  
、

古水

雲低し花ある山としられたり  
、

東鳥

花のかげ宿るこゝろに日は暮ぬ

後瀬

芝舟

花の山雲にわけ入こゝちかな

北翠

たまひたる花いたゞけば散にけり

沂山

散る花や高根をつたふうかれ雲

会月

朝の間や尾長啼たつ花の奥

加州金沢

松菊

松山の出崎に夜のさくらかな

蘭尾

桜よりくれて朝のぬれ鳥

兔文

片沢や花降る中の鷺の声

卜舟

うつりかはる世にもたのしき桜かな

麦風

下部等は穴市したる桜かな

鯉湖

夕づゝにまたわけ入ん花の山

吐雲

夜昼のわかちなき花の朧哉

羅葉

朝の間や隣のさくら静なる

犁松

人里を過て花見る桮かな

三峽

折かづくたぶさに花の薫り哉

梅嶺

程ふりて逢ふ友うれし山桜

其子

結ぶ手にさくらかゝるや瀧の下

可兆

奈良坂や轉る鳥は花の奥

素山

見おかれて花の流るゝ小川かな

すぐるゝや風なき空を桜ちる

朝日さす桜に駒のいさみかな

来て見れば川のあちらぞ山桜

曙や花の波たつ鯨道

はつざくら有あふ人の詠かな

細脛やしどろに登る花の山

春秋に切出せども山ざくら

酒呑ぬ人のすゝみや桜狩

烏甲

鈍鷺

其葉

更々

一川

南峰

勇夫

花翁

北雁

雨の後塩屋吹こす桜かな

白義

さくららふく風落付て夜の雲

一道

幕うてど中には居らぬさくら哉

文顯

遠山の花おぼろなり朝の幕

漁船

あけぼのゝ桜折ゆく馬上かな

甘谷

煙たつ花の小ぐちの藁屋哉

五曹

幾人が桜手折やゆふまぎれ

素兄

過来るや散花へだつ花の奥

凌冬

硝子のさかづきふきぬ家ざくら

李遠

藪過か軒端にすこし桜かな

馬来

山陰やむごきところに初ざくら

能州所口

暮臘

風寒し花の灯すひがし山

一形

九重や金棒ならず夜の花

黒島

玦卜

ものいはぬ人に逢けりやま桜

素玉

八重九重花をうる人浮世人

女

布遊

野桜や曙しらぬ鳥の声

玻井

空色や浅黄ざくらの吹ちるか

怡水改

柳汀

灯火につく虫もなし夜の花

麦秀

散る花の草にみだるゝあした哉

馬涼

檣にかゝる入江のさくらかな

加由

散る花を追行蝶のたはれ哉

クロシマ

犁邑

白鷺の白きをうばふさくらかな

李友

花満てさほ姫鷹の羽音哉

珥丘

花とともにくれて月照る姿哉

都山

花鳥や常さへ鳩の夕げしき

文朝

はなちける鶴の啼けり家桜

嵐峰改

岐草

散花や窟の壁あらはるる

輪ジマ

馬群

花過て雨に暮けり須磨の里

錦川

玉史

流行春や小川の花筏

穴水

玉霞

雲沈む夜のよしのゝさくらかな

川田

佳超

笠捨て我こそ出ぬ花の空

越中福光

緑水

雨ありし後をさくらのさかり哉

桃岳

風どめを天に祈らん花ざかり

奈古

麦秀

花半山かさなりて見ゆるかな

二翼

花の中まだ人がほの暮きらず

如友

家ごしや雨あたゝかに初ざくら

少年

李芳

西東花に二日のいとまかな

白老

夕栄や楼にさし入山ざくら

大西

花の雲峰にも尾にもかゝる哉

明神浦

磯仙

初桜さくらの中を咲にけり

氷見

馬十

きのふまで見ながら花のはじめ哉

馳来

日ざかりや花を出て行虻の声

都邑

さくら木は雲の天井の柱かな

岸松

笛の音や桜に雨のはれかまへ

春枝

薄ぐらき空の気色や遅ざくら

素秀

面白ふ鳥に花散る夜明かな

菊良

花曇り鐘を聞日は舟の中

壁斗

笠に散る花も見むかず茶摘哉

越後

鳥路

花盗む袖にしがらむ胡蝶かな

十日町

桃路

埃たてゝ一しほ明日のさくら哉

徐翠

花咲て近道多し嵯峨あたり

臥虹

花に狂ふ科は緊那羅摩\*暎羅哉

丹波

釈

あふひ

雨となり風となる我心花曇り

洞々

花咲や侘る人又驕るひと

快志

\*「月」扁「侯」旁

花の日や船に諷ふて舞子はま

但馬

涼秀

とし／＼や花に費す口ぶくろ

和旦

鳥さしの何おもひけん花のもと

鹿友

花にさはぐ都の人よあらし山

播州

青蘿

行過て見れば日のさす山ざくら

為荔

花いく重かさねて咲や九折

小野

君中

花や笑ふいざ脱捨む破紙衣

沾節

暮ばくれよ花を主に旅すゞり

花桂

酒のみの気持を浅黄ざくらかな

ヒメジ

葵道

花売は山を出るか花ざかり

寒鴻

夜桜やたゞ一声の鳥は何

備岡山

子坤

花散るか虻の音する夜の庭

備中笠岡

李山

中々にねぶたき花の真昼哉

枝白

山ざくら埃に埋みし硯かな

江山

人去て朧々と花にほふ

香貫

したゝかに散る日もさすが八重桜

文里

何となくしづけしけふの花曇

倉敷

露朝

けふの人皆馴染あり花ざかり

烏夕

花ざかり主のしらぬ人もなし

軒雫

鞠それて主は仰向さくら哉

一魚

燕の巢はまださびしはつ桜

桃葉

初花にしぼる手ぶりや明徳利

玉井

たのもしき道の手折や花供養

寄人

月落て烏しらむや花の空

南枝

植かへて哀れや花の咲かぬる

備後福山

李朝

守る人の留主か桜の散そむる

右汐

おしむべき花を山路の枝折哉

河翠

唯ひとり花に箕踞して日暮けり

三原 梨陰

雨いかに遠山ざくら晴わたる

土芝

山買へば初ざくらありて人告る

何笠

行さき／＼紅魚の三月花の海

府中 枕雲

花に酔し人が散る日の泣上戸

田房 古声

花に如意是も都の手ぶりかは

アキ広シマ 東吹

然るとき木樵の案内さくら狩

山沾

市中のさくら見おろせ岡の寺

蝉雨

山ざくら白馬驕て人はちる

晒之

山桜人こそしらね老夫婦

素候

太刀持や袖白妙に花の山

芝雀

おさな名を問れてゆかし軒の花

芝仙

文鎮の童子も笑つ庵の花

常曙

雨晴や桜のもとの牛車

芝川

植木屋の花を売てはおしみけり

小方

可友

花に聞蛙鶯啼上戸

几十

制札は小僧の手也初ざくら

防州

孤甫

驚かぬ花に暮行鐘の声

長州赤間

南巢

花曇りけふはうかれぬ日なりけり

薫里

酒くむや花になく声笑ふ声

羅風

さくらには鳴声もなき蛙かな

阿州

卮言

二本とは花さへいやし草の庵

讃州仁保

指馬

けふも又心残りや山ざくら

白羽

わくら葉に茶を煮る峰の花曇

宗徳

分入や道のなきまで桜狩

起石

花咲て茶のあらたまる山家かな

満里

花守の覚し枕言葉かな

汐木

三才

白浪の音せぬ花の梢かな

予州今治

素明

柴の戸や桜の月に客ふたり

卯七

龍灯に桜を照らす野川哉

几風

静さや窓に吹込花の音

挹波

大寺やさくらに交る鉋屑

蔦輔

斧にもれて半は朽し桜哉

蚕月

誤て花見ぬ里に出にけり

筑前黒崎

青人

花の雲およばぬ人の伊勢参り

錦江

花の道耕す人にことゝはん

幡榴

桜ちり終て岨の夜明かな

月池

花の山羹食ふ人臭し

万都斗

庵の花仏と我と見る日かな

朴風

花多く足れば日によく月に欲

後風

世のさまや花の中にも花曇り

ハカタ

俚雪

花にすむ雪の額の夫婦かな

直方

君花

究まらぬ山の次第を花めぐり

蝸石

朝夕や花にはづれて人見ゆる

裏梅

花散て魂我にかえるかな

元二

箸削る人に向ばや花の宿

橋雨

背負出る薪の上に花ぞ降

何来

おろかさや花に餌をまつ親鴉

飯塚

竹両

山かづら花新しき尾上かな

文里

人さつて月にさくらの匂ひかな

奇峰

磯山や桜降日の波しづか

舎丁

唐土の舟に散込さくら哉

莞尔

水はきや桜流るゝ仮御殿

士沢

花ちりて淋しきもよき舎り哉

豊前小倉

夏夕

花に酒人は上見ぬこゝろなる

南明

けふの日もみす／＼花に暮る哉

長崎

左琴

花の盛松は静にあらし山

肥後山家

駒童

麦味噌に桜も吸ふや須磨の里

サツマ

全潮

花に迷ふこのごろ老が飯うまし

対馬

孚湫

花咲や鹿の生るゝ朝ぼらけ

大坂

旧国

匂ふなる花も左近のさくら哉

伊丹

東瓦

夢にだも貞室を見ず花七日

和州上市

可翠

人はよき女房持けり花の陰

鼠来

咲花によごるゝ酒の通かな

夕山

畑打の花にかけおく瓠かな

葛城

如水

そここの花に追るゝこゝろかな

城南

秦夫

酔顔を人の見て行花見かな

雲裡

門を出て月夜さびしき桜哉

良水

鐘ふせて寄武士やゆふざくら

馬雪

観音の桜しだるる我等かな

真菅

三輪の灯に眠るも花の労れ哉

狛

麦子

春の夢さくらを見るもうき心

ダイゴ

百喟

しのゝめや夏雲うつる遅桜

宇治 松風

日の朝や夜の雨落る山ざくら

田原 紫圭

夜の花多勢ゆくもこと／＼し

ヤハタ 蛙方

花に明て花に宿かるよしの哉

古律

宦女や人見たらはぬ花のくれ

魯長

竹門を押開てゆく花見かな

洛 志諺

花いろ／＼塵塚崩す小鳥哉

一照

雨の花あるじ静に守夜かな

夢友

坂なくば母に見せたし山ざくら

蘆蝶

山ざくら夜はみどりの林かな

月の桜雲あるかたにつゞきけり

このごろや花ちりかゝり咲かゝり

名にめでゝ散らめ花の嵐山

今朝の雨含て花の真昼哉

幾人か桜かざしつ嵯峨の暮

朝の花匂はんとして散そむる

鬼若が墨に摺けり山ざくら

入相や雲おさまりて峰の花

玄兔

嘉菊

土卵

巴六

曇水

角蜂

薰河

平呑

路春

桜今不断ざくらもさかり哉

山尾

のけ襟に花吹込や京女郎

私青

明暮に山静かなるさくらかな

露虹

暁の花に拾へり舞あふぎ

管鳥

拜前や花に清香月に影

杞柳

夜桜や羽織かけたる白拍子

車蓋

暮行や次第に花のかすり雲

白黛

花に葉にむごくもちらす山桜

眉山

一坐捻香

おしむ日を雨に桜の時うつる

月雪や花に踏出す足のみめ

薄く濃く色かさなりぬ遠桜

散るこゝろ抱きてあけの桜哉

木のもとのむかしゆかしや散る桜

茎々のともぢから也花ざかり

たてまつるいくよの花の匂ひかな

山吹や桜重ぬる日もすがら

こゝろとむなど申けり犬桜

鉄翁

完而

定雅

玉屑

桃睡

百池

不木

巴龍

不朽

春の夢ふたゝびさめて花の雨

月峰

風にちらぬ花十分のけしき哉

一峰

道ふかく此日の桜咲にけり

古塘

しる人の声やくらきに花戻り

尼  
得終

鳥啼てかけるや花の山かづら

自来

野宿して花に瘦たる心かな

草牙

としごとやちり敷庭の花供養

其成

花の香や月にも日にも大内裏

芦涯

花の雲幾重こえしぞ夜の山

闌更

花の手向の数々とり／＼物する

ほどに、年並のごと梓にのぼさ

ましと、はやりおのほめかしあへるに、

心あはたゞしけれど、此堂のぬしは

越の空なつかしとて花の吹雪に

笠うちかづき、とみに出給ひぬれば、

つたなき筆にかひあつめぬる

猶々のおぼつかなく、人わらわく

ならんもいとわびし。いざやかか

かしこきすさびにまかせてんと、かの  
国にたよりす。しかはあれど舟車の  
ついへにはからずも月かさなり、日  
たけていまし漸草稿成ぬ。

同志のむつまじきに送るとて

等閑のそしりを逊んと、秃筆を

かみしだきて、其しりへにかいつけ

侍る事しかり

芦涯述

後れて来しを是にしるす

下嵯峨や桜の散て後の人

ナニハ 画涼

牛飼の花の木陰の赤面哉

築 黒崎 舍鳩

鯛の直の鰯に替るや花盛

藍江

寛政三辛亥年三月

京三条通寺町西入丁

蕉門書林 菊舎太兵衛梓

(26ウ)

(裏表紙見返し)

(裏表紙)